

流言飛語

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

かつて噂話は「ここだけの話」として人づて口伝でじわじわと広まったものだが、インターネットの普及とともにそれこそ一瞬で広範囲に伝わってしまうようになった。それにつれ、流言が社会に対して良くも悪くも大きなインパクトを与えている印象は否めないだろう。その情報が、根拠もないのにいかにももっともらしく、多くの人にとって我がことでない場合に単なる茶飲み話の一つとして広がる場合も少なくない。鳥インフルエンザが猛威を振るった折などの卵にまつわる風評被害、古くは関東大震災時の場合のようにリンチや殺人にまで発展してしまう場合、最近では学校におけるいじめ問題なども該当する。銀行における取り付け騒ぎなどもその類であろう。

SNSなどを通じて拡散する本物を偽って流されるものには、いわゆる「フェイクニュース」もある。最近ではこちらが大きく取り上げられるためか、「流言（流言飛語）」はいささか古めかしく見えてくる。福長*の定義に従えば、フェイクニュースとは「何らかの意図で作られ、拡散している虚偽情報の総称」であり、一方、流言とは「不特定多数の人びとの間に広がる、事実の裏付けのない情報」を指しているという。双方、偽作者の意図の有無という点では異なるように見えるが、いずれも事実による裏付けがない点ではまるで同じ。ことさら両者を区別して定義することが必要かどうかはさておき、昨今では、これに「生成系AI」が絡んでくるのでなおさら厄介なこととなっている。AIが自ら考えて悪意のある文章なり画像なりの情報を作るのではないが、過去の膨大な情報の中から関連しそうなもののみを検索抽出して形を整えるのであろう。このような指令を出すのはあくまでも人であり、したがって社会的な倫理観などが重要なのは論をまたない。ただある人にとっての正義が他人にとっては必ずしも正義ではない場合もあり、その境界はかなり微妙であるのは間違いないのだが、戦争状態などではこれを積極的に活用しているようだし、戦争状態ではないにしても日常的に活用して、国際政治的に有利な状況を作ろうと画策している場合もありそうだ。最近の生成系AIはこのようなフェイクニュースなど作成するのに非常に好都合なツールであるようだ。

直接的な会話を通じて拡散する場合には時間経過が比較的緩やかで、その間に誰かが否定する、あるいは打ち消し行動をとる余裕もありそうだが、SNSなどを通じて一気に拡散する偽情報は、その余地がなく始末がかなり悪い。しかも“精度”が高く、その真偽のほどを見分けるのがかなり難しいとなるとなおさらである。

フェイクニュースを意図的に作成し、世間が大きく衝動を受けるのを見て、それを愉快と考える不届きな輩もまた存在する。このような輩に情報倫理を説いたところでどうにもならず、頭の痛いことである。

対策については政府でも議論しているようだが、審議会や委員会の動きよりもAIの進化のほうが早く、対策を打ったところで後手になる。規制を言い出そうものなら必ず表現の自由の侵害という障壁が現れるであろうし、そもそもAIの利活用自体は社会的なニーズにも合致していることから、かなりの無理があ

る。そして出てきたニュースについては、フェイクと判断できたとしても、これは小説や物語の類で、著作物であると逃げることも可能であろう。これもインターネットの功罪、などと安閑としておれない状況である。

となれば、受け手の一般市民はその適否や正誤を自身で見極められるだけの感性、判断力を鍛える必要がある。それには市民がまっとうな情報を受けられる世の中であってほしい。新聞やマスメディアこそ、その責務を果たすべき存在ではなかろうか。災害時など緊急を要する場合ならなおさらで、市民にとって何が必要で、何が重要かを的確に判断できる材料を提供すること。とても難しい課題であるが、そのような見識と責任を持ち、市民の知的な寄る辺となるべく、努めてもらいたいものである。

*福長秀彦，流言・デマ・フェイクニュースとマスメディアの打ち消し報道～「大阪北部の地震」の事例から，放送研究と調査（2018.11），pp. 84-103

